

## ■ 研究論文

## ボランティア学習としての道徳授業の実践方策

## 一副読本の資料内容から

長 沼 豊

## 1. 研究の概要

## (1) 主題の設定

道徳の教科化<sup>(1)</sup>の本格実施を2018年度から控え、2015年3月には「特別の教科 道徳」を盛り込んだ「小学校学習指導要領」「中学校学習指導要領」の一部改正が発表され、同年7月には「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」も発表されている。教科化されてどのような授業を行うのか、教科書をどのように活用するのか、質の高い授業とは何か等を考察することは喫緊の課題である。

そこで本稿は道徳の授業実践のあり方について、筆者が研究を進めてきたボランティア学習の観点から論じることとする。ボランティア学習と道徳の関連性について既に筆者は「小学校道徳におけるボランティア学習の位置づけ」<sup>(2)</sup>を記している。これは道徳の学習指導要領においてボランティア学習がどのように位置づけられているのかを分析したものである。本稿はその続編に相当するもので、学習指導要領レベルではなく授業実践に資する考察を行う。具体的にはボランティアを題材としている道徳副読本の資料内容を分析し、そのことで検定教科書が作成されてからの授業実践のあり方を論じることとする。

## (2) 先行研究と研究の方法

本稿の内容に関連する先行研究として道徳副読本と福祉教育についての関連性を示したものとして上級による「小学校道徳副読本に見る高齢者問題」<sup>(3)</sup>がある。小学校の道徳副読本の中で高齢者問題について触れているものを取り上げ、その妥当性について詳細に論じている。その他に関連する先行研究としては上記拙稿で挙げたものと同様になるが吉村による「道徳教育とボランティア活動」<sup>(4)</sup>、原による「生涯学習社会における小・中学校のボランティア教育に関する基礎的研究」<sup>(5)</sup>、田坂による「ボランティアと道徳 - ボランティアと公平性についての一考察 -」<sup>(6)</sup>がある。いずれも道徳副読本とボランティア学習の関連性を扱ったものではない。そこで本稿では道徳の副読本においてボランティアが扱われているものを分析することでオリジナリティを示し、併せて道徳授業の実践方策を考察する一助としたい。

## 2. 道徳の副読本におけるボランティアの扱われ方

## (1) 道徳の副読本における「ボランティア」の掲載件数

道徳の副読本の中でボランティアについて取り上げている資料の実態を調査し、その内容につい

表1 道徳副読本におけるボランティア関連資料一覧

No.	A	B	C	学年	内容項目	資料名(A)	主題名(B)	ねらい(C)	出版社
1	○			小5	4-(4)	朝飯前のボランティア	働く喜びをもって	働くことよさを知り、進んで社会のために役立とうとする態度を養う。	光村図書
2	○			小6	4-(4)	うちら”ネコの手”ボランティア	みんなに奉仕する心	勤労の意義を知り、進んで人のためになる仕事をしよとするとする心情を育てる。	東京書籍
3	○			小3	4-(2)	公園ボランティア	働くことの大切さ	働くことの大切さに気づき、力を合わせ進んで人のために尽くす態度を養う。	東京書籍
4	○			中2	4-(2)	スポーツボランティア	支え合ってよりよい社会をつくる	ともに助け合う温かい人間愛を基盤とした社会運帯のすばらしさやともに助け合う社会の実現に尽くそうとする態度を培う。	光村図書
5	○			小5	重点：集団や社会の一員として	助け合う気持ち - ボランティア元年 -	いてもたってもいられない思い	社会に奉仕する喜びを知って、公共のために役立とうとする。	光文書院
6	○			小4	4-(2)	ネコの手ボランティア	私のできること	働くことの意義を理解し、進んでまわりの人に役立とうとする心情を育てる。	日本文教(大阪書籍)
7	○	○	○	中2	4-(5)	ボランティア活動で流した涙	ボランティアの意義	ボランティア活動の意義を考えつつ、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努めようとする心情を育てる。	教育出版
8	○	○	○	中2	4-(5)	ボランティアから学んだこと	ボランティアの心	勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努めることができるようになる。	日本文教
9	○	○	○	小5	4-(4)	ボランティアクラブに入って	奉仕する喜び	社会に奉仕する喜びを知り、進んで公共の役に立とうとする心情を育てる。	文溪堂
10	○	○	○	小5	4-(4)	ボランティアしてみよう	社会のためにできること	社会のために役立つ喜びを知り、進んで働くこととする態度を育てる。	日本標準
11	○	○	○	小5	4-(4)	わたしのボランティア体験	社会への奉仕	社会に奉仕する喜びを知って、公共のために役に立つ心情を育てる。	東京書籍
12	○	○	○	中3	2-(2)	わたしのボランティア体験	人間愛をもって	人と人との触れ合いの力に気づき、高齢者や助けを必要としている人に対して自分にできることをしようとする態度を育てる。	光村図書
13	○	○	○	中3	4-(5)	がれきの山、白一色	ボランティアへの参加	ボランティアとは何かを自覚させ、奉仕の精神をもって、社会に対する貢献と公共の福祉に努める態度を養う。	日本文教
14	○	○	○	小5	4-(4)	元気がもたえる	ボランティアの心	ボランティア活動は苦勞を伴うものであるが、感謝されたり、自分が人の役に立っていると感じたりすることができるとに気づき、社会やみんなのために進んで活動しようとする心情を育てる。	日本文教
15	○	○	○	小6	4-(4)	小さい子からもらった幸せ	ボランティア活動をして	勤労の意義を理解し、社会のために奉仕しようとする態度を養う。	東京書籍
16	○	○	○	中2	4-(2)	小さな一歩	ボランティア活動の意義	自分の行動が社会の役に立つことを知り、自分も社会の一員であるという自覚を持ち、社会に貢献しようとする態度を育てる。	正進社
17	○	○	○	中1	4-(2)	花火大会	ボランティア活動の意義	公德心及び社会運帯の自覚を深め、よりよい社会の実現に努めようとする態度を育てる。	正進社
18	○	○	○	小6	4-(4)	海は死なない	働く喜びをもって	ボランティアの大切さを知り、社会に奉仕しようとする心情を養う。	光村図書
19	○	○	○	中2	4-(5)	加山さんの願い		ボランティア活動の意義を知り、実践への意欲を高める。	日本文教(大阪書籍)
20	○	○	○	小5	4-(4)	心にかける屋根シート	働くってどういうこと?	働くこと、ボランティアすることの意義を知り、進んで人のためになることをしようとする態度を養う。	学校図書
21	○	○	○	小4	2-(4)	自転車マップ	そんけいし、かんしゃする心	社会のためにボランティアをしている人の生き方を学び、尊敬と感謝の心をもつ。	光文書院
22	○	○	○	中2	4-(4)	もっとわかり合いたい		ボランティア活動を通じて自己が属する集団の意義を理解し、役割を自覚し、集団生活の向上に努める。	日本文教(大阪書籍)

て分析・考察することにする。

東京学芸大学のWEBサイト「道徳用副読本の検索」<sup>(7)</sup>において「ボランティア」の語でキーワード検索した結果をもとに筆者がまとめたものが表1（道徳副読本におけるボランティア関連資料一覧）である。

このWEBサイトでは副読本に掲載された資料のうち、資料名（A）、主題名（B）、ねらい（C）の中に「ボランティア」という語が入った資料を各々検索することができる。結果は資料名（A）に「ボランティア」が入った資料は12点、主題名では7点、ねらいでは8点であった。このうちABC全てに「ボランティア」が入っている資料が1点（No7）、AB両方に入っている資料が1点（No8）、BC両方に入っている資料が2点（No13、14）あるため、実質は22点である。この22点の内訳を学年別に分類したものが下の表2である。

表2（道徳副読本におけるボランティア関連資料件数：学年別）

小学校	1年生	0	13
	2年生	0	
	3年生	1	
	4年生	2	
	5年生	7	
	6年生	3	
中学校	1年生	1	9
	2年生	6	
	3年生	2	

これによると、小学校では5年生用が、中学校では2年生用が多いことがわかった。また小学校1年生用、2年生用は無かった。

次に、学習指導要領の内容項目ごとに分類したものが表3である。

表3（道徳副読本におけるボランティア関連資料件数：学習指導要領の内容項目別）

2 主として他の人とのかかわりに関すること（2点）

2 (2)	中学	温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ	1	
2 (4)	小34	生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する	1	

4 主として集団や社会とのかかわりに関すること（19点）

4 (2)	小34	働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く	2	15
4 (4)	小56	働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つこととする	9	
4 (5)	中学	勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める	4	
4 (2)	中学	公德心及び社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める	3	
4 (4)	中学	自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める	1	

その他（1点）

	小5	重点：集団や社会の一員として	1	
--	----	----------------	---	--

これによると、22点のうち19点が内容4の「主として集団や社会とのかかわりに関すること」に関する資料であり、ボランティアに関わる道徳資料は、そのほとんどが内容4に関連した内容であることがわかった。残りは内容2の「主として他の人とかかわりに関すること」が2点で、「その他」が1点の計3点だった<sup>(8)</sup>。

校種別に見ると、まず小学校では13点のうち9点が4（4）の「働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする」（勤労・奉仕）であり、この9点は全て5年生・6年生であった。この項目は3・4年生の4（2）「働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く」（勤労）に該当する項目であることから、この2点も含めると13点中11点が勤労・奉仕に関する項目になっていることがわかった。その他は2（4）の「生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する」（尊敬・感謝）1点、その他1点の計2点だった。

中学校では9点のうち4点が4（5）の「勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める」（勤労・奉仕・公共の福祉）、3点が4（2）の「公德心及び社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める」（公共心・社会連帯）であり、この2つでほとんどを占めていた。残りは内容2（2）の「温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ」（人間愛・思いやり）1点、4（4）の「自己が所属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める」（役割と責任の自覚）1点だった。なお4（5）の内容項目は小学校3・4年生では4（2）、5・6年生では4（4）に該当する項目であることから、勤労・社会奉仕・公共の福祉に関わる項目の資料が小中学校合わせて22点中15点を占めていることがわかった。

次に、出版社別に見ると22点のうち最も多く道徳副読本にボランティアを取り上げていたのは光村図書、東京書籍の各4点であった。次いで日本文教、大阪書籍の各3点、光文書院、正進社の各2点と続き、教育出版、文溪堂、日本標準、学校図書は1点ずつであった。

(2) 道徳の副読本における「ボランティア」の内容（表1から）

次に資料内容について詳しく見ていく。以下では小学校の資料に絞って検討していくことにし、中学校については稿を改めることとしたい。

まずは内容として最も多かった勤労・社会奉仕・公共の福祉（小3・小4の4（2）、小5・小6の4（4））に関する資料の中から小3を1点、小5を5点、小6を3点取り上げる。以下、資料番号は表1の最左列のものである。

資料No3「公園ボランティア」<sup>(9)</sup>（小3の4（2））では、学校のボランティア週間で公園ボランティアに取り組む小学校3年生の姿が描かれる。こびりついたガムを取る経験など苦労しながら1週間の活動を終え、通りかかった人から「きれいになったね」と声をかけられる。資料の下部には「すすんでみんなのためにはたらいたことはありますか。そのとき、どんな気持ちでしたか」「くじけそうになりながらも、こういちとみのるが公園ボランティアをつづけたのは、どんな考えからですか」と書かれている。

資料No1「朝飯前のボランティア」<sup>(10)</sup>（小5の4（4））では、主人公の「ほく」が大学生の駅前

清掃ボランティアに参加していく姿が描かれる。大学生たちは20人でチームを組み、朝早く週に1、2回、20分だけと決め「朝飯前のボランティア」だと言いながら取り組んでいる。その姿に啓発された「ぼく」は一緒に参加させてほしいと言い出す。資料の後には「「いっしょに、そうじをさせてください。」と言った「ぼく」を、どう思いますか」「大学生たちの顔を見て、「ぼく」は、どうして温かい気持ちになってきたのでしょうか」「みんなのために積極的に働いて、よかったことはありますか。それは、どんなことですか」と書かれている。

資料No9「ボランティアクラブに入って」<sup>(11)</sup> (小5の4(4))では、地域のボランティアクラブに入った小学生の老人ホームでの活動が描かれる。初めての経験で緊張していた主人公だったが、クラブで習った手話をつけた歌を歌うことでおばあさんとの交流が進む。資料の後には「おばあさんの手をにぎりながら、優香はどんなことを思ったでしょう」「地域や周りの人のために役に立とうと思って行動したことや、しようと思っていることはありますか」と書かれている。

資料No10「ボランティアしよう」<sup>(12)</sup> (小5の4(4))は、いわゆる読み物資料ではなく、3つのテストで構成されている<sup>(13)</sup>。テストAは「ボランティア準備チェック」で自分自身がどのようなか確認できるような質問項目が並んでいる。テストBは「体験ボランティア きみはどんなタイプ?」で、いくつかの質問に「はい」「いいえ」と答えて矢印を辿っていくと、最後に「行動派」「慎重派」「コツコツ派」「グループ派」「リーダー派」の5つのいずれかに辿り着く。自分に向いているボランティアを見つけられるようになっていく。テストCは「自分にできるボランティアを見つけよう」で手法はテストBと同様である。最後に辿り着くのは「環境ボランティア」「障がい者ボランティア」「心のボランティア」「リサイクルボランティア」「いろいろ体験ボランティア」のいずれかである。資料の末尾には「タイプ別に、自分だったらどういうボランティアができるか考えましょう」「同じタイプになった人で集まって、実行できることについて話し合しましょう」と書かれている。

資料No11「わたしのボランティア体験」<sup>(14)</sup> (小5の4(4))では、主人公の5年生がクラスで老人ホームの高齢者とレクリエーション大会をする姿が描かれる。当初乗り気ではなかった主人公たちが、高齢者の姿や70歳くらいのボランティア(高橋さん)の話に啓発されてまたボランティアしようと言い出す。資料の下部には「高橋さんの話を聞いたとき、「わたし」はどんなことを考えたでしょうか」「あなたは、ボランティアの学習をしたことがありますか。そのとき、どんなことを思ったり、感じたりしましたか」と書かれている。

資料No20「心にかける屋根シート」<sup>(15)</sup> (小5の4(4))では、新潟県のトタン屋の跡継ぎ・岩崎さんが阪神淡路大震災の復興支援ボランティア活動に参加し、神戸市で屋根のシートはりのボランティア活動をする姿が描かれる<sup>(16)</sup>。屋根のシートはりで出会った人々との交流を通じて、感謝されて仕事をする素晴らしさを実感するようになる。活動前は跡継ぎということで仕方なくやっていた仕事だったが、自分の仕事に誇りをもつようになる。資料の後には「神戸から帰るとき、岩崎さんはトタン屋の仕事に対して、どんな気持ちを持っていたでしょう」「じぶんが社会のために働くことができたとき、どんな気持ちになるでしょう」と書かれている。

続いて6年生用の副読本である。

資料No2「うちら“ネコの手”ボランティア」<sup>(17)</sup> (小6の4(4))では、阪神淡路大震災後の避難所の小学校に避難してきた主人公(小学校5年生)が、先生たちのお手伝いをしてボランティア活動をする姿が描かれる<sup>(18)</sup>。さまざまな苦労があるものの仲間とともに遂行していく。主人公は

新6年生になり、避難者は次第に減っていく。その人たちのためにクッキーを焼こうと提案・実行し喜ばれる。避難者がいなくなった体育館で、主人公は仮設住宅に引っ越した高齢者にクッキーを届けようとつぶやく。資料の下部には「おばさんにおこられたとき、麻美はどんなことを考えたでしょう」「あなたは、どんなボランティア活動をしたことがありますか。そのとき、どんなことを思ったり、感じたりしましたか」と書かれている。

資料No.15「小さい子からもらった幸せ」<sup>(19)</sup> (小6の4(4))では、主人公が総合的な学習の時間のボランティア体験で保育園に行き、そこでの活動(交流)から学んでいく姿が描かれる。最後の一文は「ぼくは小さい子との交流で、ぼく自身がすごく幸せな気持ちになれた」である。資料の下部には「小さい子との交流を終えたとき、「ぼく」はどんな気持ちだったのでしょうか」「社会のために働くことの大切さやうれしさについて話し合ってみましょう」と書かれている。

資料No.18「海は死なない」<sup>(20)</sup> (小6の4(4))では、1997年に日本海で座礁したロシアのタンカー・ナホトカ号から流出した重油で被害を受けた福井県の三国町で重油を取り除く活動をしたボランティアの姿が描かれる。地元で旅館を営む中本さん(ボランティアの一人)が、全国から来たボランティアの人たちから励まされ、有り難いと思う出来事が描写されている。なかには天候のために一度も重油除去ができないまま帰っていく人たちもいたが、せめてもと空き缶を拾うボランティアの姿も中本さんは目撃する。資料の後には「一度も重油にさわりもしないまま帰っていくボランティアの人たちは、どのような気持ちだったのでしょうか」「中本さんは、全国からやって来たボランティアの人たちの、どのようなところにはげまされ、ありがたいと思ったのでしょうか」「あなたは、どのように、人や社会のために役立ちたいと思いますか」と書かれている。

### (3) 道徳の副読本における「ボランティア」の内容(表1以外)

小学校の場合ボランティアについての資料は5・6年生に集中していることから、表1の検索によって挙がってこなかった出版社の副読本にボランティアに関する資料が全く掲載されていないとは考えにくい。そこで例として学習研究社の副読本を調べたところ、内容4(4)の資料として5年生で2点、6年生で2点が掲載されていた。なぜこの4点が当該サイトに掲載されていないのかは不明である<sup>(21)</sup>。

5年生用は「ギブ・キッズ・ザ・ワールド」<sup>(22)</sup> (障がい児とその保護者のために米国のヘンリー・ランドワースさんが創ったテーマパークの話、以下資料Aと表記)と「小さな手から」<sup>(23)</sup> (阪神淡路大震災の際の避難所で小学生の主人公が先生たちと一緒にお手伝いをする話、以下資料Bと表記)、6年生用は「マザー・テレサ」<sup>(24)</sup> (ノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサの活躍を紹介する話、以下資料Cと表記)と「この思いをフェルトペンにたくして」<sup>(25)</sup> (東日本大震災後に石巻日日新聞社が情報伝達のために避難所に掲示した手書きの壁新聞の話、以下資料Dと表記)である。

次に、民間の出版社ではなく、文科省発行の副読本ではどのような内容が取り上げられているのか興味があり調べてみたところ、小学校5・6年生用「私たちの道徳」では内容4(4)に関する項目は150～155頁の6頁構成となっていた<sup>(26)</sup>。そのうちボランティアについての内容は最後の2頁で「社会のために力をつくす」(154頁)という題の文章が13行、東日本大震災後の復興ボランティア活動について記されている(以下資料Eと表記)。155頁には「自分にできるボランティア活動」を「話し合ってみよう」と書かれており、まず「私たちは地域や社会のために何ができるでしょう」という問いがある。あとは書き込むスペースになっており、「できること・したいこと」を3つ書き、

各々の下に「活動してみた感想」を書くという表になっている。

次に、小3・小4の内容2(4)(尊敬・感謝)に関する資料の内容を確認することにする。表1の検索で唯一表示された資料No21「自転車マップ」<sup>(27)</sup>(小4の2(4))について確認したところ、光文書院の副読本に掲載されている資料は「自転車マップ」から変更されていた<sup>(28)</sup>。資料名は「石油列車、東北に向かって走れ！」で、主人公「ぼく」の父親の活躍が描かれる。東日本大震災の直後、石油を運ぶ貨物列車の線路の通常ルートが使えなくなり、貨物列車を走らせる会社の司令室に勤務する主人公の父親は、遠回りをさせて運行させることを決意する。線路が重さに耐えられるか調べる人、機関車集めに協力する人など沢山の人の協力を得て神奈川県根岸から岩手県盛岡まで貨物列車を走らせた実話である。資料の後には「この話に出てくる人たちは、なぜ、石油列車を走らせるためにがんばったのでしょうか」「あなたの身の回りにも、人々のためにがんばってはたっている人がいませんか」と書かれている(以下、資料No21(変更後)と表記する)。

### 3. 分析と考察

以上の調査結果をもとに、道徳副読本における「ボランティア」の扱われ方の実態について分析・考察する。

#### (1) 資料の主人公と活動内容から

まず資料の内容を探る上で最も大きな違いが現れるのは主人公の属性である。道徳副読本の他の資料も同様であるが、主人公が子ども(授業の対象学年かそれに近い年齢)の場合と大人の場合がある。上記調査で取り上げた作品(表1記載以外も含む)15点のうち、いわゆる読み物資料ではないNo10を除いた14点を分類してみると、主人公が子どもである資料はNo1、2、3、9、11、15にBを加え計7点、主人公が大人である資料はNo18、20、21(変更後)にA、C、D、Eを加え7点で、ちょうど半々であった。

主人公が子どもの場合は、その主人公がボランティア活動に取り組んでいる、またはこれから取り組もうとしている姿が描かれている。読み物資料の主人公を子どもにする意図は、ボランティアに限らず他の資料も同様であるが、心情の読み取りや共感性の高まりの容易さにより道徳的心情に迫ることができるからと考えられる。7点の内容を詳しく見てみると多い順に3点が学校の教育課程として取り組むボランティア活動(資料No3、11、15)、2点が阪神淡路大震災後の避難所(小学校)でのボランティア活動(資料No2、B)、1点が地域のボランティアクラブでの活動(資料No9)、1点が駅前の大学生の清掃活動に触発されて一緒に活動したいと申し出るもの(資料No1)となっている。このことから小学校の児童にとって最も身近なものとして取り組んでいる活動事例を掲載していることがわかる。例えば資料No15は総合的な学習の時間で行う保育園での活動を描いている。実際、小学校ではこのような取り組みが行われることがあるため、活動の後でこの資料を活用した道徳授業を行えば道徳的な心情理解が容易になるだろう。逆にこの資料を活用した道徳授業の後に総合でボランティア活動を行えば事前学習(動機づけ)としての意味も付加されることになり効果的である。

次に主人公が大人の場合は、一般的な活動の事例からボランティア活動の特性や社会的意義について児童に考えさせ、自らの取り組みへの動機づけとすることや、大人たちの活動に感謝する心情

を養うというねらいがあると考えられる。7点の内容を詳しく見てみると多い順に3点が東日本大震災後のボランティア活動（資料No21変更後、D、E）、2点が海外のボランティア活動（資料No.A、C）、1点が阪神淡路大震災後のボランティア活動（資料No20）、1点が重油除去の活動（資料No.26）であった。このことから新しい話題や児童が知っている話題を取り上げて、できるだけ児童にわかりやすい内容にするよう工夫していることがわかる。震災ボランティア活動はマスコミでも多く取り上げており、マザー・テレサは著名な活動家であったからである。大人の活動を取り上げる場合には、主人公が子どもの場合と比べて心情理解や共感性が容易ではないため、より身近に感じさせるような工夫を施していると考えられる。例えば資料No21（変更後）では、主人公の父親が東北に石油を運ぶ司令室に勤務しているという設定とし、子どもが父親の仕事ぶりを語る形式を採っている。

なお、主人公が子どもの場合と大人の場合に共通して、資料の後や下部に提示される質問は、児童に読み物資料を通して考えさせるための質問となっているが、全ての資料で複数の質問を挙げている。その内容の傾向として最初の質問は読み物資料の主人公または登場人物の心情を理解させるためのもので、例えば資料No.1は「「いっしょに、そうじさせてください。」と言った「ぼく」を、どう思いますか」となっている。これは登場人物の心情に寄り添うことで道徳的心情に触れ、道徳的価値を考えさせる契機とするねらいが見て取れる。後半の質問は読み物資料の内容から離れて、一般的なボランティアや社会貢献などについて考えさせるようなもので、例えば資料No.1は「みんなのために積極的に働いて、よかったことはありますか。それは、どんなことですか」となっている。この2段構成で道徳的価値に触れさせ、道徳的実践力を高めるというねらいを達成しようとしていることがわかる。

## (2) ボランティアの何を考えさせようとしているのか

ボランティアのどのような側面に焦点を当てて道徳的価値に迫ろうとしているのかを探ってみる。学習指導要領の内容項目の視点から考察する。

まず取り上げられている学年についてであるが、表1以外の調査も加味すると小学校では5年生、次いで6年生が多いことがわかった。そしてその内容項目としては5・6年生の4（4）「働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする」（勤労・奉仕）に該当する資料であった。同じ内容に相当する1・2年生の4（2）は皆無であり、3・4年生の4（2）は2点しかなかった。このことから、ボランティア活動についての理解に関しては発達段階を考慮すると小学校では5・6年生の児童が妥当ではないかという考え方が一般的であることがわかる。ボランティア活動は社会貢献・社会参画の手段であり個人と社会を結ぶ社会的行為であるから、社会的意義を理解できる年齢を対象にすることは不可欠であると考えられる。また学習指導要領の文言が1・2年生および3・4年生の4（2）は「みんなのために働く」となっているのに対して5・6年生は「公共のために役に立つことをする」となっていることから、出版社においてボランティアを題材にするのは5・6年生がふさわしいという判断がなされているのだろう。

ただし、ボランティアという語を使わないものとして1～4年生でも十分理解可能な題材はあるだろう。表1の検索では資料名・主題名・ねらいの中に「ボランティア」という語があるものが表示されているが、そうでない資料であっても内容項目4（2）であればボランティア活動に近い内容が扱われていることもありうる。例えば、光村図書4年「ぼくにできること」<sup>(29)</sup>（代表委員会で



行ったユニセフ募金)、文溪堂3年「大そうじ」<sup>(30)</sup>(家の大掃除で父親と窓ふき)などはボランティア活動につながる話題である。同じことは学年の相違だけでなく、内容項目の相違でもありうると考えられる。つまり内容項目4(2)、4(4)、2(4)以外のものでもボランティア活動につながる内容が現れている可能性がある。

このことについては拙稿「小学校道徳におけるボランティア学習の位置づけ」の内容と比較して考察したい。この中で筆者はボランティア学習に関連する内容項目として7種類を挙げた<sup>(31)</sup>。

- ① 「1 主として自分自身に関すること」の(2)
- ② 同(3)
- ③ 「2 主として他の人とのかわりに関すること」の(2)
- ④ 同(4)(5・6年生は(5))
- ⑤ 「4 主として集団や社会とのかわりに関すること」の(3)(5・6年生)
- ⑥ 同(2)(1・2年生、3・4年生)(5・6年生は(4))
- ⑦ 同(3)(1・2年生、3・4年生)(5・6年生は(5))

このうち上記調査で道徳副読本として現れたのは中学の関連項目も含めて③④⑤⑥の4種類であった。逆に現れなかった項目は①②⑦の3種類であった。つまり副読本の資料としてボランティア活動が扱われる内容は③「思いやり・親切」④「感謝」⑤「主体的な参加・参画」⑥「社会貢献への理解・意欲」の4点であり、①「実践意欲・意志」②「自律的な行動力」⑦「家庭でのプチボランティア」の3側面は現れていなかった<sup>(32)</sup>。現れた4点はいずれもボランティア活動の中核をなす内容であり妥当である。現れなかった3点はいずれも「ボランティア」という語を用いない行為として現出する可能性が高いため資料として現れない、またはあっても検索で表示されないということである。自分自身に関する2点①②(内容1(2)(3)に関するもの)をボランティア学習と関連するとしたのは自発性・主体性との親和性があるからである。実際、資料No10においては自分自身のことについて考えさせ、それを導入として個々に適した活動を考えるという構成になっている。したがって当該内容項目の資料においても、ボランティアという語は現れないとしても内容的にはボランティア学習として位置づけられるものもあるだろう。そこで内容1(2)(3)に関する資料がないかどうか副読本を調べたところ、内容1(2):光村図書5年「チャンピーー日本人が育てた盲導犬-」<sup>(33)</sup>(1956年、塩屋賢一さんの話)、内容1(3):光文書院5年「心の管理人」<sup>(34)</sup>(スーパーの前の自転車置き場の置き方について考える)などが例として該当した。

また、⑦家庭内のプチボランティアについても同様に「ボランティア」という語で表現されない行為である。内容4に関する資料を同様に調べたところ、内容4(3):文溪堂1年「おてつだい」<sup>(35)</sup>(5枚のおてつだいの場面絵で考える)、内容4(5):東京書籍6年「おばあちゃんのさがしもの」<sup>(36)</sup>(車いす生活になった祖母とのふれあい)などが例として該当した。

以上のことから、道徳副読本の資料としてボランティアが登場するのは、自発性・主体性よりも公共性(それも奉仕という名の社会貢献)の文脈で捉えられていることが多いことがわかった。

次に、ボランティア活動では活動した本人にとっても有益であるという視点、すなわち支援する側・される側といった一方的な関係ではなく、双方にとって有益であるという視点(双方向性と筆者は呼ぶ)について考えてみたい。これは「ボランティア学習」が成立する要因であるため鍵概念である。そこで、調査資料に「活動を通して自らも学ぶことができた」という視点が内在しているかどうか確認してみた。すると15点のうち資料No10、15、18、20、Aの5点が該当することがわかっ

た。例えば資料No15は主題も「小さい子からもらった幸せ」とあるように、6年生の主人公が保育園でのボランティア活動で3歳児たちとの交流を通して「幸せな気持ちになれた」ことを描いている。また資料No20は、単に屋根のシートをはるという一方的な支援を描くのではなく、出会った「おばあさん」に貴重な水やパンを分けてもらったり、ボランティア保険の登録をしてもらったりという相互支援の姿が描かれている。主人公は「今までとはちがったじぶんをみつけられたような気がした」とも言う。このような良質な資料を通して児童がボランティア活動は双方向の支援であることに気づくことは意義がある。ボランティア活動の本質的な価値に迫ることができるからである。

### (3) ボランティア活動の分野から（新しい題材を取り入れる柔軟性）

調査した資料のうち、比較的新しいものを扱ったものとしては東日本大震災後のボランティア活動が挙げられる<sup>(37)</sup>。資料No21（変更後）、D、Eの3点が該当する。資料21については表1の検索では古いものが表示されていたが、最新のものには盛岡に石油を運ぶ列車の事例が掲載されていた。このように新しい題材を取り入れて掲載することの有用性を指摘しておきたい。ボランティア活動は日々進化し、新しいニーズのもとで活動が展開されているからである。もちろん新しいものだけが良いというわけではないが、常に出版社が新しい題材を求めて掲載していくという仕組みは重要である。なぜならこのことは教科化にともなって検定教科書が作成されることとも関係してくるからである。道徳の教科化によって、これまでのいわゆる副読本ではなく検定教科書になるわけだが、そのことで新しい題材を取り入れる即時性が失われるとすれば、道徳授業からリアル感が喪失し大きな損失となるだろう。

資料No Eの内容の貧弱さは他と比べて明らかである。他の資料はおおむね4頁程度の読み物を読んで児童がボランティア活動について考えるように設定されているが、内容の薄い文章（わずか13行）で考えさせるという構成になっている。このような教材を模範として今後検定教科書が作成されることのないよう切に願いたい。

ちなみに阪神淡路大震災は資料No 2、20、Bの3点で、上記東日本大震災の3点と合わせ15点のうち6点が震災復興の題材ということになる（さらに資料No18の重油除去も災害系であり、これを加えれば7点である）。分野別に見れば、老人ホーム・保育園や貧困支援などの福祉系が資料No 9、11、15、A、Cの5点、清掃・環境系が資料No 1、3の2点、残りの1点は多分野網羅型で資料No 10であった。災害復興と福祉系が多いことがわかる。

## 4. まとめと課題

本稿では道徳の副読本にボランティアがどのように取り上げられているか調査した。その結果、小学校では5年生、中学校では2年生に多く資料として掲載されていることがわかった。ボランティア活動の社会的意義を理解し社会に役立つ行為をしようとする道徳的実践力を養うという趣旨と照らし合わせれば小学校高学年以上が妥当であると考えられる。ただしボランティアとして掲げていないものの1～4年生の副読本においてボランティアにつながる内容の資料が存在することも確認した。道徳の授業は「プレボランティア学習」としての機能もあるということである。

学習指導要領の内容項目においては「勤労・奉仕」に該当するものがほとんどであった。内容4だけでなく1や2においても資料が作成・掲載されボランティア活動（学習）の多様性が示される

ことを望む。

資料の主人公は子どもと大人が半々であった。同じ学年の子どもの実践から学ぶことと大人の実践からボランティア活動の素晴らしさを感じ取ることのどちらも有益であり、その意味で同一学年の副読本に両方を掲載している東京書籍（資料No.2と15）、日本文教（大阪書籍）（資料No.19と22）、学習研究社（資料AとB、CとD）の姿勢は評価できるのではない。

資料で取り上げられているボランティア活動の分野については災害復興系と福祉系が多かった。ボランティア活動の分野は多様であることから、改善の余地があるのではない。

今後道徳の教科化にともなって副読本に代わって検定教科書が活用されることになるが、ボランティアについても良質な内容の資料が掲載されることを望む。複数の出版社の副読本を調査してわかったことは、道徳については既存の教科の教科書以上に資料の取り上げられ方に差があるということである（例えば主人公が子どもと大人、分野が災害と清掃など）。どの副読本を活用するかによって違った教育的効果が出ることも考えられる。そこで、今後道徳授業で教科書を利用することになっても、それを絶対視してそれのみを活用するのではなく、適宜教員が良質だと判断する良質な資料を併用して活用することが望ましい。これはボランティアに限らず他の内容についても同様なのではないか。教科書「を」教えるのではなく、教科書「で」教えるということを実践して効果を上げてほしい。

本稿では対象学年、主人公の属性、ボランティアの双方向性などの視点で道徳の副読本の資料内容を分析したが、別の視点での分析も可能である。さらにプレボランティア学習の資料を1～4年生の副読本から抽出し分析することもできる。これらは今後の課題である。また、本稿では実践方策と言っても副読本の資料の内容分析にとどめている。副読本を用いたボランティアについての道徳授業については今後の課題である。実際の授業実践においてどのように活用されているのか、事例に即した分析を今後行う予定であり稿を改めることとしたい。

- 
- (1) 正確には「特別の教科」化。検定教科書を用いることは従前の教科と同様であるが、中学校において教科別独自の教員免許がないことと数字による評価（評定）を行わないことは従前の教科とは異なる。「特別の」の意味はその点にある。
  - (2) 長沼豊「小学校道徳におけるボランティア学習の位置づけ」、学習院大学文学部研究年報第58輯、2011年、pp.115-129。
  - (3) 上續宏道「小学校道徳副読本に見る高齢者問題」、『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究年報Vol.2』東洋堂企画出版、1997年、pp.158-174。
  - (4) 吉村文男「道徳教育とボランティア活動」、『道徳と教育』41（3・4）、日本道徳教育学会、1996年、pp.86-90。
  - (5) 原壽「生涯学習社会における小・中学校のボランティア教育に関する基礎的研究」、『道徳と教育』46（1・2）、日本道徳教育学会、2001年、pp.110-127。
  - (6) 田坂さつき「ボランティアと道徳ーボランティアと公平性についての一考察ー」、『湘南工科大学紀要 第36巻 第1号』2002年、pp.105-114。
  - (7) 「平成25年4月版」、同年6/19更新

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~kokoro/searchbook/index.html>（筆者2015年7月10日最終確認）

このサイトでは対象12社の道徳副読本から学習指導要領の内容項目やキーワードで該当する資料を検索できて有益である。12社はあかつき、光文書院、光村図書、学校図書、学習研究社、教育出版、文溪堂、日本文教、日本文教（大阪書籍）、日本標準、東京書籍、正進社である。

- (8) 「その他」は学習指導要領の内容項目の複数に関わる内容だった。
- (9) 東京書籍3年生用『明るい心で どうとく3』、pp.62-65。
- (10) 光村図書5年生用『道徳5年 きみがいちばんひかるとき』、pp.158-161。
- (11) 文溪堂5年生用『5年生の道徳』、pp.38-39。
- (12) 日本標準5年生用『みんなで考える道徳5年 こんなときどうする?』、pp.83-87。
- (13) こどもくらぶ編『はじめのボランティア⑩ボランティアはじめて体験』同友館、と記されている。
- (14) 東京書籍5年生用『希望を持って 道徳5』、pp.136-140。
- (15) 学校図書5年生用『かがやけみらい 道徳5年』、pp.118-121。
- (16) 岡村和夫作「心に残るいい話」による、と記されている。
- (17) 東京書籍6年生用『明日をめざして 道徳6』、pp.76-80。
- (18) 『続・ぼくらの阪神大震災 はじまりの虹』（小学館）「うちら“ネコ”の手ボランティア」による、と記されている。
- (19) 東京書籍6年生用『明日をめざして 道徳6』、pp.24-27。
- (20) 光村図書6年生用『道徳6年 きみがいちばんひかるとき』、pp.128-133。
- (21) 職業として活動したものはボランティアとは言わない、避難所の小学生が手伝いをするのは「当事者の活動」であってボランティアではないというような考え方にに基づいているものと考えられる。
- (22) 学習研究社5年生用『みんなのどうとく5年』、pp.54-56。
- (23) 学習研究社5年生用『みんなのどうとく5年』、pp.126-129。
- (24) 学習研究社6年生用『みんなのどうとく6年』、pp.16-20。
- (25) 学習研究社6年生用『みんなのどうとく6年』、pp.146-149。
- (26) 文部科学省「私たちの道徳 小学校5・6年」pp.150-155。
- (27) 光文書院4年生用『新版 ゆたかな心 新しいどうとく4年』、pp.58-61。
- (28) 同様に資料No5も掲載されておらず、資料は変更されていた。
- (29) 光村図書4年生用『どうとく4年 きみがいちばんひかるとき』、pp.36-37。
- (30) 文溪堂3年生用『3年生のどうとく』、pp.90-91。
- (31) 前掲(2) p.118の表1。
- (32) ボランティア学習に即した内容項目の名称については拙稿(2) p.122の表2を参照。
- (33) 光村図書5年生用『道徳5年 きみがいちばんひかるとき』、pp.154-157。
- (34) 光文書院5年生用『新版 ゆたかな心 新しい道徳5年』、pp.128-129。
- (35) 文溪堂1年生用『1ねんせいのどうとく』、pp.8-9。
- (36) 東京書籍6年生用『明日をめざして 道徳6』、pp.91-95。
- (37) 本稿執筆は2015年9月で、東日本大震災は2011年3月。